経済セミナー

8・9
2023
No.733
日本評論社

2023年9月1日発行（年6回奇数月の1日発行）　通巻733号 昭和32年4月18日　第3種郵便物認可 ISSN 0386-992X

THE KEIZAI SEMINAR

特集

経済論文の書き方
［アドバンスト編］

座談会　**アクセプトに向けた論文の書き方**
竹内憲司×手島健介×松本健一×横尾英史

魅せる「イントロ」の書き方
山崎晃生

新連載　どうする独裁者：数理・データ分析で考える権威主義　第1話
独裁者として生きる道／浅古泰史・東島雅昌

立ち読みサンプル

特集

Feature

経済論文の書き方
［アドバンスト編］

論文のメッセージを、より多くの人々に
わかりやすく伝えるには、一体どうすればよいのだろうか？
今回は、研究の進め方、学術論文の書き方のコツを解説。
論文の第一印象が決まる場である「イントロ」を書くテクニックも伝授。
エキスパートたちの技術と工夫に迫ってみよう。

座談会

Discussion

アクセプトに向けた論文の書き方

竹内憲司 × 手島健介 × 松本健一 × 横尾英史
Takeuchi Kenji　Teshima Kensuke　Matsumoto Ken'ichi　Yokoo Hide-Fumi

座談会

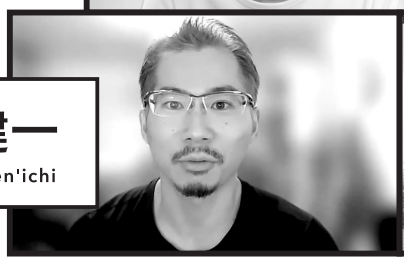
アクセプトに向けた論文の書き方

竹内憲司
Takeuchi Kenji

手島健介
Teshima Kensuke

松本健一
Matsumoto Ken'ichi

横尾英史
Yokoo Hide-Fumi



研究を始め、論文を書き上げるためにどんなことを心がければよいのだろうか？ 今回は、主に研究論文の執筆や、ジャーナルへの投稿も視野に入れた「学術論文の書き方」にフォーカス。どのようにリサーチクエスチョンを立て、投稿に向けて論文をどう仕上げていくか、自分のキャリアもふまえて論文をどのように書いていけばよいのか、査読に進んだ場合の対応で困ったらどうすべきか、といった実践的なポイントも含め、第一線で活躍する研究者たちがその経験とノウハウを伝授！

1 はじめに

横尾 一橋大学大学院経済学研究科の横尾と申します。本日は、われわれ環境・資源・エネルギー経済学分野の研究者が中心となってネットワーキングや情報交換、議論の場として運営している「J-TREE（Japan-Tokyo Resource and Environmental Economics）」[1]というセミナーシリーズの第2回ワークショップとして、「アクセプトに向けた論文の書き方」と題したパネルディスカッションを行います[2]。登壇者として京都大学の竹内憲司先生、一橋大学の手島健介先生、東洋大学の松本健一先生をお招きし、私がモデレーターを務めさせていただきます。「論文の出発点は何か」「投稿するジャーナルはどう選ぶか」「ライティングで意識すべきことは何か」「共同研究に取り組むにはどうすればよいか」「書いた論文を投稿に向けてどう仕上げていくか」、さらには「査読コメントにどのように対応すべきか」といったテーマで、日ごろのご経験などもふまえて幅広くディスカッションをお願いしたいと思います。それでは、はじめに自己紹介をいただきます。竹内先生から、よろしくお願いします。

竹内 京都大学大学院地球環境学堂および経

竹内憲司さん（たけうち・けんじ）

京都大学大学院地球環境学堂／経済学研究科教授。
京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士（経済学）。神戸大学大学院経済学研究科教授等を経て、2022年より現職。専門は環境経済学の実証分析であり、とくに最近は気候変動適応やプラスチック廃棄物の抑制などをテーマに研究に取り組んでいる。
主な著作に、“Holding Back the Storm: Dam Capitalization in Residential and Commercial Property Values,”（共著）*Journal of Environmental Economics and Management*, 116, 102732, 2022, “Does Drought Increase Carbon Emissions? Evidence from Southwestern China,”（共著）*Ecological Economics*, 201, 107564, 2022, などがある。

もちろん、研究プロジェクトとしてスタートする直接のきっかけとしては「このデータが使えるようになった」「ある重要な政策が行われた」などもありえますが、これらの出来事を研究に結び付けて考えるためには、「この理論のこの部分はまだ検証されていない」などといったことが頭に入っている必要があります。そういう知識があるおかげで、新しいデータや政策を目にしたときに、「これを使ってこの問題が検証できるのではないか」といった形でリサーチクエスチョンを思い付くことができるわけです。つまり、過去から蓄積してきたさまざまな準備の中に研究をスタートさせるきっかけが潜んでいるということです。

ただし、竹内先生と少し異なるかもしれない点として、自分の場合は「このデータがあったからこの研究ができた」といった例もそれなりにあります。データがブレークスルーとなって研究プロジェクトが始まり、論文になったというケースですね。

横尾　なるほど。これまで吸収してきた理論などがリサーチクエスチョンの着眼点になる場合もあれば、イノベーティブなデータが使えるようになったことが論文の出発点になる場合もありうる、ということですね。松本先生は、最近書かれた論文はどんなことが出発点になっていますか。

松本　私の場合は、いわゆる計量経済学的な分析だけでなく、応用一般均衡モデル（Computable General Equilibrium：CGE）など、別の方法論を使うことも多いからというのもあると思うのですが、お二人とは少し違って、先行研究や日々の雑談の中でおもしろそうなテーマが出てきたら、それについて考え始めて、データもあるようなのでやってみよう、といった感じで研究が始まることが多いです。もちろん雑談で「これ、おもしろいね」と言っていたレベルからリサーチクエスチョンにしていくわけですが、私の場合のそもそもの出発点は、先行研究や雑談、データなどになると思います。

山崎晃生　政策研究大学院大学の山崎です。登壇者外からの質問となりますが、よろしくお願いします。私が博士号を取得したカナダのカルガリー大学の知り合いに、データなど研究に関することも含めて頻繁にTwitterに投稿している研究者がいるのですが、その人は自分のTwitter投稿がきっかけで始まった研究がいくつかあると言っていました。手島先生もTwitterをよくやられていると思うのですが、投稿をきっかけとして研究が始まったようなケースはありますか。

手島　Twitterが直接の研究のきっかけになったことはないのですが、たとえばおもしろい論文の情報などについて投稿している若手

松本健一さん（まつもと・けんいち）

東洋大学経済学部教授。
関西学院大学大学院総合政策研究科博士課程後期課程修了。博士（総合政策）。長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科准教授等を経て、2023年より現職。環境やエネルギー・資源に関する問題や政策について、経済学的・政策的な研究を行う。とくに、気候変動・エネルギー分野で、応用一般均衡モデル（CGE）や統計・計量経済モデル、多様な指標を用いた定量的な研究を専門とする。
主な著作に、“Heat Stress, Labor Productivity, and Economic Impacts: Analysis of Climate Change Impacts Using Two-way Coupled Modeling,”（共著）*Environmental Research Communications*, 3(12), 125001, 2021, “Challenges and Economic Effects of Introducing Renewable Energy in a Remote Island: A Case Study of Tsushima Island, Japan,”（共著）*Renewable and Sustainable Energy Reviews*, 162, 112456, 2022 などがある。

ることが期待できるジャーナルに投稿しようとか、そういった話はもちろんします。とはいえ、基本的にそういう制約がなければ、アクセプトされる可能性があると考えられる中でできるだけよいジャーナルをねらいます。

横尾　では、厳密に期限が決まっている学生などではなくて、ポスドクなど含めてアカデミックポストに就いている若手研究者が相談に来た場合、ジャーナルの選び方や投稿戦略についてどんなアドバイスをされるでしょうか。松本先生はいかがですか。

松本　実際、論文を多く出版しているから就職できるとも限らないので、何をねらっていくかはなかなか難しいのですが、そうはいっても就職において論文の本数もある程度は重視されると思うんですよね。

横尾　論文のインパクトと本数にトレードオフがあるというお話ですか。

松本　はい。トレードオフはあると思っていて、そのとき比較的時間に余裕もあり、研究プロジェクトを複数持っていれば、多少時間がかかりそうでもなるべくよいジャーナルに投稿すればよいと思うし、逆にこの論文は少しでも早く出版したいといった事情がある場合は査読期間の短いジャーナルをねらうし、といった戦略になりますよね。

横尾　かっちりした方程式のようなものがあるというよりは、各人の置かれた状況や持っているプロジェクトに応じてケース・バイ・ケースということですね。

松本　はい。ポスドクなどの場合は、できるだけ早く論文を出版することが求められる場合もあるので、そのときは査読の早いジャーナルに投稿せざるをえないといった事情もあると思います。このあたりは個人の判断というか、その時点で自分が何を優先するかによる気がします。

横尾　手島先生は、たとえば博士課程の学生などに投稿戦略や、それをふまえた論文作成について相談された場合にどんなアドバイスをされますか。

手島　松本先生の話と共通する部分もあるのですが、キャリア上の評価として、どれだけの論文を出版してきたかという側面と、どの程度おもしろい・野心的なプロジェクトに取り組んでいるかといった意味でのポテンシャルの高さという側面の両方がありうると思います。経済学部の場合、海外の多くの大学はそうですし、国内でもそうした傾向が加速しているように思いますが、とくにテニュアトラック制度がある大学の場合は、就活の時点でジャーナルに出版した論文がない場合でも、ジョブマーケットペーパーのポテンシャルが重視されて、まずは任期付きで採用されると

にはその論文で得られた知見がなぜ重要なのかが伝わるように書くことを心がけています。もっとも、アメリカ経済学会（American Economic Association：AEA）が発行するジャーナルの場合は「100語前後」と指定されているので[5]、その場合は論文でやったことを書くだけで終わってしまうので諦めないといけないのですが……。イントロは、その論文での貢献を伝えられるようにうまく話をつなげることを心がけて書いています。

横尾　ありがとうございます。確かに、アブストってジャーナルによって単語数の指定がかなり違いますよね。これは経済学系のジャーナルに顕著なことなのでしょうか。

松本　いや、150～250語くらいで指定されることが多い気がしますが、どの分野も状況は同じだと思います。加えて、稀にですが、ジャーナルによってはアブストにもセクションを付けて書くように求められることもあります。

横尾　確かに、サイエンス系などにはそういうのがありますね。AEAのジャーナルの100語は特別に短いと思うのですが、たとえば150語と250語であっても書き込める情報量がまったく異なります。同じ論文が何度もリジェクトされて、再投稿を繰り返すようなこともあると思うのですが、そういうときに毎回アブストを規定の単語数にあわせて書き直さなければいけないと思うと本当に憂鬱です。私は最近、最初に投稿する際に150語のバージョンと250語バージョンをあらかじめ用意しておくようにしているのですが、皆さんは毎回書き直しているのでしょうか。

松本　まあ、投稿規定で単語数を定められてしまうとやらざるをえないので、それはもう仕方がないかなと思いますね。

山崎晃生　登壇者外なのですが、また質問させてください。皆さんは投稿規定の単語数ギリギリで書かれていますか。私の場合は毎回100字でまとめるようにしています。

横尾　なるほど、確かにそういう戦略もありえますね。

松本　ただ、規定によっては「250字程度で書きなさい」と指定されるケースもあるので、どうしても書き直す必要は出てきますよね。

横尾　竹内先生はいかがですか。たとえば「250語以下」みたいな規定の場合に100語で書いて投稿したりしますか。

竹内　そうですね。私の場合は短く書いて出すことが多いです。というのも、自分としてもアブストが長いと読む気が失せてしまうので、アブストはできるだけ短い方がよいと思っています。アブストなのに問題の背景から書いてあったりすると「そこから始めなくても……」と感じたりもするので、短くまとめた方がよいのではないかと思います。

横尾英史さん（よこお・ひでふみ）

一橋大学大学院経済学研究科准教授。
京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士（経済学）。東京大学大学院環境学研究系国際協力学専攻助教、国立環境研究所主任研究員等を経て、2019年より一橋大学。2023年より現職。インド、インドネシア、ベトナム、日本などアジア諸国の人間行動に着目した環境政策の設計と評価を専門とする。
主な著作に、“Subjective Risk Belief Function in the Field: Evidence from Cooking Fuel Choices and Health in India,”（共著）*Journal of Development Economics*, 161, 103000, 2023, “What Makes Green Persuasion Effective? Evidence from a Community-Financed Sanitation Program in Indonesia,”（共著）*Resource and Energy Economics*, 73, 101371, 2023, などがある。

魅せる「イントロ」の書き方

論文の内容を伝えるために、特に重要とされる「イントロ」。
読者を惹き込み、メッセージをクリアに伝えるためには、
何に気を付け、どう書き進めればよいのか？
読者の心をイントロでつかむためのポイントを
ステップ・バイ・ステップで懇切丁寧に解説！

山崎　晃生　Yamazaki Akio
政策研究大学院大学准教授

1　はじめに

政策研究大学院大学の山崎晃生と申します。私はこれまで、主に環境経済学（環境政策、地球温暖化）を専門に研究し、査読付きの国際学術雑誌に論文を発表してきました。本稿では、これまでに私が学んできた論文の書き方の中でも、特に「Introduction（イントロ）」の書き方に焦点を当てて、そのエッセンスを解説していきたいと思います。

まずは、私がなぜこの記事を執筆しているのか、その背景からお話しします。私は、高校から米国に留学し、修士号の取得まで現地で勉強しました。そのため、修士号を取得した時点で、英語の文章力にはある程度の自信を持っており、そのような状態で、博士号取得のためにカナダのカルガリー大学に入学しました。しかし、そこで指導教員になっていただいたM. Scott Taylor（MST）教授から[1]、研究のノウハウにとどまらず、論文の書き方・報告の仕方についても、厳しい指導を受けることになりました。MST教授は、環境経済学・国際貿易を専門とし、一流学術誌に数多くの論文を発表しています。また、環境資源経済学分野で影響力のある環境資源経済学会（Association of Environmental and Resource Economists）において、独創性があり永続的な価値を持つ著作に贈られるPublication of Enduring Quality Awardも受賞されています[2]。英語に自信があったはずの私の論文の草稿は、MST教授に見せるたびに無残にも赤ペンだらけで返ってきました。そのことにショックを受けつつも、MST教授からいただいた赤ペンの指摘に基づいて改訂を重ねるにつれて、アカデミック・ライティングの奥深さに気づかされました。それと同時に、研究するうえで「論文の書き方」がいかに大切かということも、身をもって学ぶことができました。私は、博士課程在学中に３本の論文を書きましたが、自分で何度も読み返し、書き直したはずの草稿が、MST教授から真っ白な状態で返されることは、博士号を取得するまでついに一度もありませんでした。就活（俗に言う「ジョブ・マーケッ

ト」）間近になったときに、“This is an excellent introduction.”といつもの赤ペンで1行だけ書かれた草稿が返ってきたあの日の達成感は、一生忘れられません（もちろん、イントロ以外はいつも通り赤ペンだらけでしたが……）。

研究者として生きる場合、論文を書くことを避けて通ることはできません。論文を書くモチベーションは人それぞれだと思いますが、「より多くの人々に自分のメッセージを伝えたい」と望むことは、研究者ならば誰しも共通だと思います。そのために意識しなければならないのが、「論文のイントロをどう書くか」です。

本稿は、環境・資源・エネルギー経済学分野の研究者が中心となってネットワーキングや情報交換、議論の場として私が共同で主催している「Japan-Tokyo Resource and Environmental Economics（J-TREE）」[3]というセミナーシリーズで開催した、「イントロの書き方」ワークショップの内容がもとになっています[4]。ワークショップでは、私自身が指導教員であるMST教授から長年にわたって指導を受けてきた「イントロの書き方」のエッセンスを説明し、若手の研究者や学生の方々から多くの反響をいただきました。そこで、その内容を永久保存版として本稿にまとめることにしました。ワークショップでは、実際の私の論文を題材に、MST教授の赤ペンが入る前の「草稿版」と、それを受けて改訂した「公刊版」とを比較しながら、魅せるイントロを書くコツを解説しました。本稿でも、できる限り当日の雰囲気を再現する形で、MST直伝の「イントロの書き方」をお伝えしていきたいと思います。

2　なぜイントロが大事なのか？

なぜ、ワークショップで個別に書き方を取り上げるほど、イントロが大事なのでしょうか。それは端的に言えば、「イントロが読者に対して、その論文全体の第一印象を与える場所だから」です。たとえば、テレビショッピングを想像してみてください。仮に、売り手が売りたいと思う商品に何らかの欠点や他社製品に劣るところがあったとしても、あるいは業界ナンバーワンの商品ではなかったとしても、消費者に「買いたい」と思わせるプレゼンを行うことで、その商品が大ヒットにつながることもあります。その反面、今まで誰も思いつきもしなかった新発明や、他社商品よりもはるかに優れた性能を備えているにもかかわらず、プレゼンがうまくできていないせいでまったく売れない、といったこともあるかもしれません。

論文の場合もまったく同じことが言えます。どれだけすばらしい研究内容・結果だったとしても、伝え方や論文の書き方がヘタだと、読者にそのすばらしさがまったく伝わりません。反対に、それほど中身の濃くない研究だったとしても、伝え方・書き方次第で傑作に化けさせることができるかもしれません。ぜひ、自分を「論文を売る敏腕セールスマン」だと考えて、自分の論文と向き合ってみてください。これから本稿では、「敏腕セールスマン」になるために必要なスキルを、順を追って詳しく解説していきたいと思います。

3　イントロを構成する6つの要素とそれぞれの書き方

ここからは私の2つの論文、2022年に*Journal of Public Economics*に出版された

山崎晃生さん（やまざき・あきお）

政策研究大学院大学准教授。
2009年、カリフォルニア大学デイビス校経済学部を卒業。2011年、南カリフォルニア大学にて経済学修士号取得。その後、カルガリー大学の博士課程に進学し、2019年に経済学博士号を取得。カルガリー大学経済学部非常勤助教授、政策研究大学院大学助教授等を経て、2022年より現職。
専門は環境経済学で、特に炭素税やカーボンプライシングなどの環境政策、地球温暖化対策に関する実証研究に取り組み、*Environmental and Resource Economics*, *Journal of Public Economics*, *Environmental and Resource Economics*などの査読付き国際学術雑誌に論文を発表している。
業績の詳細は著者のホームページ（https://akioyamazaki.weebly.com/）も参照。

“Environmental Taxes and Productivity: Lessons from Canadian Manufacturing”（Yamazaki 2022）と、2017年に*Journal of Environmental Economics and Management*に出版された“Jobs and Climate Policy: Evidence from British Columbia’s Revenue-Neutral Carbon Tax”（Yamazaki 2017）を題材に、イントロの書き方を具体的に説明していくことにしましょう[5)]。これらはどちらも一流の専門誌（公共経済学と環境経済学）に掲載された論文であり、査読の過程でエディターの心をしっかり（イントロで）つかめたことが、アクセプトされた大きな要因だと自負しています。

MST流の書き方では、イントロを大まかに、以下の6つの構成要素に分割して考えていきます（図1も参照）。

① イントロ（Intro）
② 主要な特徴（Key attributes）
③ モチベーション（Motivation for the approach/question）
④ 研究結果（Key results on characteristics）
⑤ リテラチャーレビュー（Literature review）
⑥ ロードマップ（Road map of the rest of paper）

この中で最も書きやすいのは「⑥ロードマップ」なので、まずはそこから解説することにしましょう。

⑥ロードマップ

「⑥ロードマップ（Road map of the rest of paper）」とは、その名の通りイントロ以降の論文がどのように構成されているかを述べる部分です。基本的には、1つの段落の中で、イントロ以降のSection（節）の内容を、順番に箇条書きで並べていくのですが、1つだけ意識するべき点があります。それは、「センテンス（文）の構造」です。例を挙げて説明するのが一番わかりやすいと思いますので、まずは図2に示したYamazaki（2022）のロードマップをご覧ください。

Yamazaki（2022）には、全部で8つの節とAppendix（付録）があります。図2を見ると、第2節と第3節については箇条書きスタイルで各節の内容を述べていることがわかります。このまま残りの節も箇条書きで書いてしまうこともできますが、第4節でセンテンス構造を変化させています。具体的には、第4節と第5節の内容を、接続詞（while）を用いてつなげて書いています。続く第6節

中級

どうする独裁者

数理・データ分析で考える権威主義

浅古泰史・東島雅昌

〈第1話〉独裁者として生きる道

頼朝「わしには時がない。わしは北条の婿となり、北条を後ろ盾として、悲願を成就させる。それゆえ、政子殿に近づいたのだ」
義時「……悲願？」
頼朝「お前だけには話しておく。いずれわしは挙兵する。都に攻め上り、憎き清盛の首を取り、この世を正す」
義時「お待ちください」
頼朝「法皇様をお支えし、この世をあるべき姿に戻す！ そのためには、政子が、北条が欠かせぬのだ。よいな。ことは慎重に運ばねばならん」

1 独裁者の決意

これは、2022年に放送されたNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の第2話「佐殿の腹」のラストシーンです。源頼朝（佐殿）のことを信頼できない北条義時に対し、頼朝が湯河原の温泉につかりながら、その腹の内を見せるところです。この言葉に感銘を受けた義時は、この後ずっと頼朝を支え続けることになります。そして、ここから頼朝、そして源氏が武家の頂点となり、源氏の世を作っていく物語がはじまります。印象的なシーンですね。

でも、ちょっと待ってください。「源氏の世を作る」と言っても、どうやって作ればよいのでしょうか。「浅古の世を作る」とか、「東島の時代にする」などと軽々と言うことはできても、実際にどうしたらよいかわからない人がほとんどでしょう。民主主義のリーダーになる方法は、（難しそうですが）なんとなくわかります。でも、時は平

浅古泰史
Asako Yasushi
早稲田大学政治経済学術院准教授。
2009年、ウィスコンシン大学マディソン校にてPh.D.（経済学）取得。専門は、公共選択論、数理政治学、応用ゲーム理論。主著：『政治の数理分析入門』（木鐸社、2016年）、『ゲーム理論で考える政治学――フォーマルモデル入門』（有斐閣、2018年）、*Analyzing Electoral Promises with Game Theory*（Routledge, 2020）、『活かすゲーム理論』（共著、有斐閣、2023年）。

東島雅昌
Higashijima Masaaki
東京大学社会科学研究所准教授。
2015年、ミシガン州立大学にてPh.D.（政治学）取得。専門は、比較政治学、権威主義体制、中央アジア政治。主著：*The Dictator's Dilemma at the Ballot Box: Electoral Manipulation, Economic Maneuvering, and Political Order in Autocracies*（University of Michigan Press, 2022、邦語版：『民主主義を装う権威主義――世界化する選挙独裁とその論理』千倉書房、2023年）。